

〈エッセイ〉

## 切実さと好奇心の狭間としての民俗学の可能性

辻本 侑生

### 1. 民俗学における切実さと好奇心

筆者は、普段民間企業に勤務しながら、プライベートで民俗学の研究を行っている者である。民俗学は「野の学問」と呼ばれる通り、大学等に属さない在野の立場であっても、研究を続けやすい分野であると言われる。しかしながら、研究に割く時間の捻出が難しい、職場で理解が得られないことがある等、いわゆる「在野研究者」固有の課題があるのも事実である。このような課題に直面すると、自分がなぜ民俗学を続けているのか、わからなくなってしまうことが少なくない。

こうした中、民俗学者・島村恭則が著した『みんなの民俗学』を読んでいると、「民俗学の本を読むことで、私を拘束していた「お祈り癖」や「死のケガレ」の問題が解決し、それどころか、その世界がたいそう面白いと思えるようになってきた」（島村2020：13）という一節があった。これは島村が高校生のころまで抱えていた、強迫的な思念や習慣から離れられないという切実な問題が、民俗学との出会いによって解決され、さらには好奇心に変わっていったというエピソードであった。

上記のエピソードを読んだ筆者は、民俗学という学問を切実さと好奇心の狭間を往還する実践として捉え、その新たな可能性を考えられることができないだろうか？と考えた。本稿は、筆者のごくささやかな経験を振り返ることで、なぜ自分が民俗学を続けているのか、現時点での回答を出しつつ、切実さと好奇心を往還する実践としての民俗学の可能性を実験的に提起するものである。

## 2. 筆者の民俗学的実践における切実さと好奇心

### (1) 好奇心から出会う切実さ

人びとを取り巻くあらゆる日常を研究対象とする民俗学にとって、フィールドワークは切り離せない営為である。筆者にとってのはじめてのフィールドワークは、2009年1月、「派遣切り」で困窮した労働者を支援するために東京都の日比谷公園に設置された「年越し派遣村」で、3日間ボランティアをしたことであった。

当時高校1年生だった筆者は、テレビの報道で「年越し派遣村」を目にして純粋に興味を持ち、自宅から自転車で行ける距離だったので、中に入りたいと思った。しかし、いざ日比谷公園に行ってみると、ボランティア登録をしないと、中に入ることはできなかった。そこで、受付でボランティア登録をすると、軍手とバンダナを渡された。バンダナはボランティアであるかどうかを識別するシンボルで、バンダナを身に着けてない人がうろつきまわるとは許されなかった。特に厳しく排除されたのは写真を撮ろうとする野次馬で、「撮影禁止」というプラカードを持ったボランティアが巡回し、しばしば野次馬を注意していた。

結局、筆者は「年越し派遣村」に3日間通い、主に全国から寄せられた大量の支援物資（リンゴが多かった）の仕分けを行った。高校生同士のボランティア仲間もでき、また年の離れたボランティアや、避難してきた中でもボランティアに協力的な派遣労働者の方と話をすることもあった。しかし、そこで筆者は「年越し派遣村」にきた理由について、正直に「興味があった」と話すことができなかった。今思えば、これが他者の切実な問題へ踏み込むことへの躊躇であり、切実さと好奇心との狭間での悩みの始まりだったのではないかと思う。「年越し派遣村」は、単純な好奇心でフィールドを訪れた結果、金融危機とそれに伴う失業という、他者の極めて切実な問題を垣間見ることとなる、いわば筆者のにとってのはじめての民俗学的フィールドワークであった。

### (2) 好奇心から切実な問題に向き合うことへの葛藤

筆者は中学・高校時代に山岳部に所属していたことから山村の暮らしに興味があり、大学入学後、現在も生業として焼畑を継続している福井県の山村でフィールドワークを開始した。夏休み等を使ってのべ50日ほど滞在し、調査結果をもとにはじめて学術論文を執筆した（辻本2014）。しかしある時、泊まり込んでいたある村の人の家で、「ここで何がしたいんや？何が知りたいんや？」と問われて全く答えることができず、

他者の暮らしを研究対象としているにもかかわらず、切実な問題意識が欠落している自分自身にショックを受けた。好奇心だけで民俗学をやっているのはダメだ、ということフィールドから学んだのである。

こうした時に頭に浮かんだのは、東日本大震災のことであった。筆者が高校を卒業し、大学に入る直前の2011年3月に、東日本大震災が発生した。翌月に大学に入学し、ずっと震災のことが気になりながらも、ボランティアなどをすることなく大学生活を半分過ごしてしまった。「年越し派遣村」での経験から、自身がボランティアとして被災地に行っても何もできないのではないかと言い訳をしつつ、大学生としての新生活に逃げていたのである。

ところが、大学3年生になった2013年の夏、震災の研究に取り組むきっかけが訪れた。陸前高田市が実施する文化財等保存活用計画策定調査の一環として行われる民俗調査に、調査助手として参画するチャンスが与えられたのである。被災地の調査に取り組む上で、筆者が念頭に置いたのは、民俗学者・地理学者の山口弥一郎（1902～2000）であった。山口は、1933年に発生した昭和三陸津波の2年後から三陸各地でフィールドワークを行い、数十年に一度、三陸地方を襲う津波によって集落が移動する現象に注目し、1943年に著書『津浪と村』を刊行した（辻本2020a）。山口の著書を読んでいると、民俗学の視点が震災後の現代日本においてもアクチュアリティを持つように感じ、純粹にとても面白く感じた。

しかし同じころ、単なる「学問」や「研究」の名の下で被災地の「調査」を行い、自身の研究業績を得ようとすることに對し、再考と反省を促す著書が出版され（菅2013）、その著書を読んだことで、被災地に行くかどうか強く逡巡するようになっていた。震災という他者の切実な問題を利用して、自身の好奇心を満たすような営為ではないかと思ったからである。結局、非常に悩んだ結果、被災地をフィールドとして卒業論文（辻本2016）を執筆する代わりに「(学術)研究者」としての進路選択は放棄し、行政計画策定というプロジェクトに関わることで存在を知った、公共コンサルティング業界に就職することとなった。

ただし、実際に被災地のフィールドで出会った切実さは、当然、筆者自身の小さな悩みなどとは比べ物にならないものであった。被災地調査を卒業論文にだけ利用することは許されないという思いと、ともに「民俗学」的な調査を行うフィールドの方との出会いから、地域住民との協働的な研究実践を現在も継続している（辻本・戸羽2017）。

### (3) 自身の切実さへの回帰と社会課題への挑戦

大学在学中に取り組んだ東日本大震災被災地のフィールドワークは、自身の関心を出発点としつつ、他者の切実な問題に関わることを試みていた。しかし筆者は、自身にとって切実な問題である、差別やマイノリティといったテーマには一切向き合っていなかったのである。

様々なもやもやを抱えながら就職活動をしている最中の2014年3月に、現代民俗学会で研究会「社会的排除に民俗学はいかに向き合えるのか—排除の日常・文化を記述する術を探って—」が開催された。筆者はこの研究会に参加したことや、その後の出会いをきっかけに、差別やマイノリティの問題について、自分自身が民俗学の視点から取り組まなければいけないという思いを強くするようになった。そして就職1年目の2015年夏、差別に関心がある民俗学の研究仲間たちと、自主研究団体（通称「差別研」）を立ち上げた。この「差別研」は現在もオンラインで定期的に開催しており、部落差別の問題や、疾病・障がいの問題など、多様な研究課題を扱うコミュニティとなっている。そして筆者自身は、この「差別研」の活動を通して、自身の切実な問題を、逆に学術研究上の好奇心へと展開させることができたのである（辻本2020b）。

さらに、社会人3年目の2017年より、筆者は勤務先において主に福祉分野での受託調査・計画策定支援を担当するようになった。当初筆者は福祉を数ある社会課題の一つとしか捉えていなかった。しかし、2018～2019年にかけて体調を崩して公的福祉サービスを利用することとなり、福祉は自身にとって切実な課題となったのである。こうした経緯を経て、現在筆者は、福祉×災害、福祉×マイノリティといったように、公共コンサルタントとしての業務と、自身のこれまでの民俗学的関心の掛け合わせを模索し、好奇心や切実さから飛び込んだ研究テーマと、社会課題の解決とをつなげる方途を模索しているところである。

### 3. 複数の「研究」の往還に向けて

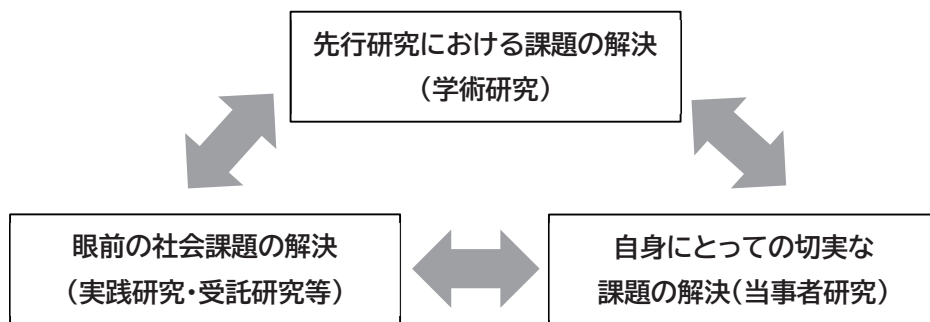
本稿は、何のために在野で民俗学の研究を続けているか、わからなくなってしまった筆者が、自分自身のためにこれまでの実践を振り返り、民俗学に取り組む理由を説明し直したものである。こうした文章は、本誌のような公共性を持った媒体には相応しくないかもしれないが、これまで述べた自身の取り組みから、民俗学的実践のあり方をどのように考えられるか、私見を述べて本稿を締めることとしたい。

筆者は、「年越し派遣村」や東日本大震災被災地のようなフィールドに接すること

で、個人的関心から出発したとしても、他者そして社会の切実さへ向き合う必要性を強く自覚することとなった。一方、他者の切実さに向き合った後に、自身の切実さにも向き合うこととなったが、それは自身の抱える問題を好奇心に変えて探求を促す、ある種の「当事者研究」的な展開をたどることとなった。また、筆者は被災地研究と向き合う中で「(学術)研究者」を目指す進路選択を避けることとなったが、その結果、社会課題の解決に取り組む「実践研究・受託研究」の世界に足を踏み入れることとなったのである。

このように、切実さと好奇心を往還する中で、筆者は「学術研究」、「当事者研究」、「実践研究・受託研究」というように、複数の「研究」と名のついた営為に取り組むこととなった。これらはいずれも「研究」という文字が含まれているものの、例えば先行研究の積み重ねによる議論を重視する「学術研究」と、社会課題の解決を要請されて取り組む「実践研究・受託研究」は大きく性格が異なっているのは周知のとおりである。しかしながら、筆者はこの性格の違いを強調するのではなく、むしろいずれの「研究」も、自他の切実さと好奇心によって生み出される探求心に支えられているのではないかと、ということを指摘したい。誤解を恐れずに言えば、一人の人間の中で、悩みながらも複数の「研究」を往還すること、そしてその往還の経験を互いに共有していくこと(図表1)が、アカデミズム／在野、大学／社会(民間)、研究者／当事者、といった立場による分断を超えた民俗学的実践につながるのではないだろうか。この仮説は、今後の取り組みによって修正が必要になるかもしれないが、他分野の方々を含めた皆様のご意見をいただきつつ、実践を続けていきたいと考えている。

図表1 切実さと好奇心に支えられる複数の「研究」の往還モデル



出典：筆者作成

## 引用文献

- 島村恭則 2020 『みんなの民俗学—ヴァナキュラーってなんだ?—』 平凡社
- 菅豊 2013 『「新しい野の学問」の時代へ—知識生産と社会实践をつなぐために—』 岩波書店
- 辻本侑生 2014 「高度経済成長期の山村における消費—経済活動のコンテクスト分析—」『現代民俗学研究』6
- 辻本侑生 2016 「昭和初期の岩手県気仙郡綾里村における津波災害への対応」『歴史地理学野外研究』17
- 辻本侑生・戸羽清次 2017 「地域住民と外部調査者の協同作業による景観復原の実践—小友町只出集落における取り組み—」中野泰編『川と海の民俗誌：陸前高田市横田・小友地区民俗調査報告書：気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究・民俗学部門報告書』（科研費基盤研究B報告書）
- 辻本侑生 2020a 「山口弥一郎の津波調査の方法と社会的文脈」福島県立博物館『山口弥一郎旧蔵資料調査報告書（福島県立博物館調査報告第41集）』
- 辻本侑生 2020b 「いかにして「男性同性愛」は「当たり前」でなくなったのか—近現代鹿児島事例分析—（特集・民俗学的「差別」研究の可能性—「日常」からのアプローチ）」『現代民俗学研究』12

## 付記

本稿は2021年3月20日に開催された現代民俗学会第54回研究会「どうしてこれが民俗学!?:カフェ・で・ヴァナキュラーの試み」での報告をもとにしたものです。また本稿は、若手人文系研究者が運営する「探求→究する家」(<https://tankyusuruie.wixsite.com/home/>)における活動によって生み出された成果です。